

【寄稿】

「ICT を活用した高次脳機能障害者の就労支援」

滋慶医療科学大学院大学

准教授 岡耕平 PhD

障害というのは個人の中にあるわけではなく、個人と環境との相互作用によって現れるということが ICF によって示された。これはつまり、個人と環境との相互作用によっては「日常の活動への障害」や、「社会参加への障害」を取り除くことができるということである。障害があるとされる人が就労において ICT を活用する意義とは、まさに環境を個人に合わせてカスタマイズすることでそういう日常活動や社会参加の障害を取り除くことにある。ICT 武装が障害を取り除くのである。

一般的に教育やリハビリや訓練というものは人を社会に合わせようとする考えが強い。これも間違いではないと思うが、人はそれほど変わらないものである。環境を変えるコストに比べたら、人を変える人的時間的コストは大きい。だからこそ、道具やテクノロジーを使い、ルールを調整することで環境を人に合わせるほうが重要なのだ。とはいえ、どのような障害にどのような道具やテクノロジーが、あるいはどのようなルールの調整が有効なのかということについては正解があるわけではない。結局、個別ケースによるということになってしまい、専門的な知識がなければ途方に暮れてしまうばかりである。

この文章はきっと就労支援従事者の方が読むことがあるだろう。筆者が就労支援従事者に伝えたいのは、障害種別を抛り所に ICT の活用を検討するとうまくいかないということである。「高次脳機能障害」と診断された人で全く同じ症状の人を見つけることは困難だろう。人の数だけ障害の種類がある、という人もいる。しかし、字が書けなくて困っている。人から聞いた話をすぐに忘れてしまって困っている、予定を忘れてしまって困っている、言いたいことはあるのにうまく言葉で伝えられず困っている、といったように「困る場面」においては多くの人に共通するパターンが見られる。だから、就労支援従事者は障害種別に対して ICT をどう使うかという観点ではなく、どんな困る場面に対してどんな (ICT による) 解決策があるかという観点から情報を整理していただきたい。

他方、この文章は高次脳機能障害があると診断された方も読まれることがあるだろう。以前は苦勞なくできていたことがうまくいかない、練習してもうまくできるようにならない、そういう状態に歯痒い思いをされる方は少なくないのではないと思う。そのような方に伝えたいのは、何かがうまくいかないときには「目標を変える」というやり方と「(目標を変えずに)手段を変える」というやり方の2つがあって、自分がいま取り組んでいるのがそのうちのどちらのやり方なのか、自覚しておくことが大切だということだ。以前できたことをもう一度できるようになりたいと思うのはとても自然なことで、それがうまくいかないのが悩み、自信をなくすことになってしまう。多くの方はそこで「目標を下げる」というやり方を選択する。これは生活の中ではとても大切なことで、自分の負荷を下げることで楽に生きられるようにするということは重要である。ただ、そこに納得がいかないこともあると思う。そういうときに目標を達成するための「手段を変える」という方法をとることも大切かもしれない。山登りに例えると、同じ山頂を目指すのに以前と同じルートを選ぶ必要はない。別のルートで山頂を目指すという選択肢もある。

ここで改めて就労支援における ICT の活用の話に戻そう。就労支援における「合理的配慮」について、その配慮には 2 種類あるということを支援者側も当事者側も知っておくことが重要である。それは先に述べた「目標を変える(主には目標のレベルを下げる)」という調整と、「(目標を変えず)目標達成のための手段を変える」という調整である。前者をモディフィケーションといい、後者をアコモデーションという。どちらも重要なアプローチではあるが、優先的に検討していただきたいのはアコモデーションである。みなさんが想像されているよりもおそらく近年の ICT は進歩している。自分自身の能力のみで何かがうまくいかなかったとしても ICT の能力と自分の能力を組み合わせることで、ひとりのできることの範囲を広げることが可能な社会に既になってきている。

アコモデーションの課題は「試してみないと本当にそれが有効かどうかわからない」ことにある。だからこそ、支援者側は対象者にたくさんのアコモデーションを試す機会を設けて欲しいし、当事者側にはいろいろ試して「この方法ならできる」という方法を経験して欲しいと思う。大切なのは、何ができないかではなく、どうすればできるかということであり、どうすれば苦手なことをやらずに済ませられるかということである。もちろん、ICT は万能ではなく、即効性のある特効薬でもない。ICT を使うための練習もいるだろう。ただ、その練習は「いつできるようになるかわからない」ものではない、そういうものであってはいけぬ。先ほどの山登りの例で言うならば、山頂がどこにあるのか、今自分がどれくらい山頂に近づいているのかわかるようになっていないといけぬ。人は見えないゴールに対して頑張ることはできないものである。だからこそ、いろいろ試して、これならいけるかもしれないと思える方法を見つけられる機会が重要になる。

こういう困る場面ではこういう ICT が使えるかもしれないとあたりをつけることは一般の人には難しい。そういうアイデアや専門知識がないためである。だからこそ、本書を利用して欲しい。本書の内容に加えてもう少し情報が欲しい方には筆者が以前まとめた「テクノロジーを活用した発達障害のある人のための就労マニュアル」(このタイトルをネットで検索していただければダウンロードリンクが見つかる)や東京都障害者 IT 地域支援センターのウェブサイト tokyo-itcenter.com 等が役に立つかもしれない。最近ではスマートフォンやタブレット端末の機能やアプリケーションで、すぐ手に入り気軽に試すことのできるものは増えている。気軽に試し、ICT 武装で自分に合った環境を作り上げると良い。

高次脳機能障害のある人にとって重要な課題になるのが、日常生活と就労である。この 2 つは分けて考える必要はなく、むしろライフスキルと就労スキルを関連させて考える必要がある。生活場面においても就労場面においても、個人が困る場面は大体共通する。この個人が困る場面を朝から晩まで時系列に沿って整理してみると良いと思う。朝ごはんの準備に時間がかかるとか、忘れ物をしてしまうとか、人混みの中を歩けないとか、メモをうまくとれないとか、人の話が理解しにくいとか、そういった困る場面はおそらく 10 から 20 くらいに収まるだろう。だとすれば、それら困る場面ひとつひとつに解決策を用意すれば良い。自分で用意できない時には、支援者や同僚そして家族の力を借りるのも良い。多くの周囲の人は何もしてくれないのではなく、どう力を貸せば良いのかわからないから何もしないというケースが多い。どんな場面でどう困るのか、整理して人に伝えるだけでも前進である。

社会学者の星加良二さんが「障害とは不利益の集中である」という話をしてくれたことがある。つまり、目が見えないとか、耳が聞こえないとか、そういうことが「障害」なのではなく、目が見えないことによって自分だけが活動できなかつたり、参加できなかつたりするという「不利益がいつも自分に集中して起こることこそが障害」だというのだ。この考え方は重要だと思う。目が見えない、耳が聞こえない、といったことはどうすることもできない場合が多い。しかしながら「その人に不利益を集中させない」という目標であれば、やりようはある。その方法のうち最も有効なものひとつが ICT であろう。高次脳機能障害のある人にとって、不利益を集中させないためのツールとして ICT が活用されることが当たり前の社会にしなければならない。

索引

困り感キーワード検索

	機能	掲載ページ	見落とし(ミス)がなくなる	漢字が読めない	入力が苦手、書くことが苦手	覚えられない	集中できない	疲れやすい	処理に時間がかかる	言葉が出てこない	必要な情報に注意を向けられない	イライラする	文字や写真だけではイメージしにくい	計画を立てられない
Windows	読み上げ	14	●	●							●			
	音声入力(音声認識)	16			●									
	タイムライン	18				●								
	タッチキーボード	20		●	●									
	集中モード(Focus Assist)	22					●							
	拡大鏡	23	●					●						
	ハイコントラストの調整とカラーフィルター	25						●						
	キーボードやマウスのテクニック	27							●					
	単語登録	29			●				●	●				
	キーボードショートカット	31							●					
	スタートメニューのカスタマイズ	33									●			
iOS	メモ	38				●								●
	カレンダー(スケジュール)	42				●								●
	リマインダー(タスク管理)	44				●								
	アラーム	47						●				●		
	カメラ(写真)	49				●								
	カメラ(動画)	51				●							●	
	Map	53				●								●
	音声入力	55			●	●			●					
	ボイスメモ	56				●								
	連絡先	57				●								
	Office Lens	58		●	●									
	ヘルスケア	60							●					

目的別索引

目的	ページ
目視以外の方法で見直したい	14
聞いた方が理解しやすいので、文書を読み上げてほしい	14
読めない漢字でも入力したい	14、20
上司からの口頭指示をメモしたい	16
文書やメールを作成したい	16、29
入力をできるだけ素速くしたい	16、29
昼休憩の後に、午前中どのような作業を行っていたのか思い出したい	18
一日の取組み状況を振り返り、作業日誌の作成に役立てたい	18
集中して仕事に取り組みたいとき、作業のメリハリをつけたいとき	22、33
疲れを予防したい	23、25
小さい文字を識別したい	23
片手でもスムーズにキーボードの操作をしたい	27
誤入力を少なくしたい	27
マウスの操作を工夫したい	27
入力作業をするときに作業の効率を上げたい	27、29、31
スキャンした文書に注意点を書き込みたい	38
書類の整理や検索が苦手なので対処したい	38
麻痺の影響で紙に文字を書きにくい	38
写真や動画を使った作業手順書を作成したい	38、51
スケジュールを通知してほしい	42、44
日々のスケジュールを管理したい	42
複数の仕事を忘れないようにしたい	44
決められた時刻や場所に着いたらお知らせを送ってほしい	44
生活習慣を維持したい	47、60
アラームを鳴らして休憩を促してほしい	47
話し合った内容や必要な情報を写真で記録したい	49
作業の途中経過を写真に撮って、どこまで何をしたのか覚えておきたい	49
タイムラプスで動画を撮影し、一日の様子を把握したい	51
作業の動作をスローモーションで撮影し、作業のコツを掴みたい	51
朝夕の通勤時間を見積もりたい	53
目的地までの経路を検索したい	53
筆記用具を持っていないが、メモに残したい	55
聞き取った内容が正しいか確認したい	55、56
口頭で受けた指示を録音し、後から聞き返したい	56
同僚の名前と顔を一致させたい	57

配付された書類を読み上げてほしい	58
再発予防に取り組みたい	60
日々の運動を忘れずに記録したい	60

【コラム一覧】

音声認識をうまく使うコツ	20
記憶障害とは	22
IME 手書きとの違い	24
高次脳機能障害と疲労の関係	26
物理的な環境調整	33
メモリーノートをタブレットで代替した時にできること（まとめ）	46
睡眠はとても重要！睡眠と高次脳機能障害の関係	52
タブレットを用いたビデオフィードバック	57
遂行機能障害とその補完手段	59

引用文献

- [1] 原 寛美, “記憶障害のリハビリテーション,” *BRAIN and NERVE*, 第 70 巻, 第 7, pp. 829-840, 2018.
- [2] 独立行政法人 高齢・障害者雇用支援機構 障害者職業総合センター職業センター, “高次脳機能障害の方への就労支援 支援マニュアル No.1,” 2006.
- [3] 中島八十一, “高次脳機能障害の現状と診断基準,” 著: 高次脳機能障害ハンドブック—診断・評価から自立支援まで, 医学書院, 2006, pp. 1-20.
- [4] 独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用支援機構 障害者職業総合センター, “高次脳機能障害者の働き方の現状と今後のあり方に関する研究,” 調査研究報告書, 第 121, 2014.
- [5] 中山 剛 他, “高次脳機能障害者の日常生活支援を目的とした PDA 用ソフトウェアの開発,” 電子情報通信学会技術研究報告, 2004.
- [6] 中山 剛 他, “高次脳機能障害者の支援を目的とした携帯電話アプリケーションに関する研究,” 電気学会論文誌. C(電子・情報・システム部門誌), 2010.
- [7] 独立行政法人雇用・能力開発機構 職業能力開発総合大学校 能力開発研究センター, “テクノロジーを活用した発達障害のある人の就労マニュアル,” 独立行政法人雇用・能力開発機構 職業能力開発総合大学校 能力開発研究センター, 2010.
- [8] 中邑賢龍 近藤武雄 監修, 発達障害の子を育てる本 ケータイ・パソコン活用編, 株式会社講談社, 2012.
- [9] 総務省, “平成 30 年度通信利用動向調査,” 総務省, 2019.
- [10] 岡 耕平, “タブレット PC やスマートフォンで変える特別支援教育,” 実践 特別支援教育と A T (アシスティブテクノロジー) 第 2 集, pp. 6-9, 2013.
- [11] 渡邊 修 山口武兼 橋本圭司 猪口雄二 菅原 誠, “東京都における高次脳機能障害者総数の推計,” *Jpn Rehabili Med*46, pp. 118-125, 2009.
- [12] 独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用支援機構 障害者職業総合センター職業センター, “高次脳機能障害者のための就労支援～対象者支援編～ 支援マニュアル No.11,” 2014.
- [13] “Microsoft アクセシビリティホーム,” <https://www.microsoft.com/ja-jp/enable/>.
- [14] 櫻井利明, 楽しくて速い PC ショートカットキー, 株式会社アントレックス, 2009.
- [15] 独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用支援機構 障害者職業総合センター職業センター, “記憶障害を有する高次脳機能障害者の補完手段習得のための支援 実践報告書 No. 30,” 2017.

発行日 令和2年3月

編集・発行 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構
障害者職業総合センター職業センター
<所在地> 〒261-0014 千葉県千葉市美浜区若葉3-1-3
<電話> 043-297-9043(代表)
<URL> <http://www.nivr.jeed.or.jp>

NMR